

わが胸に重りゆきおも

人類の教師ソクラテスは死に臨んで、「アスクレピオスの神殿に鶏一羽をお供えしなければならなかった。その責を果たしてくれ」と家人に頼んだ。一羽の鶏だけが心残りだったわけである。

私の場合はとてもそんなものではない。お礼の仕残しだけでも山積みそのままだろう。それに気がついて、少しでも減らそうと急に思ったが、いよいよ増え、重くなるばかりだ。

先日、久しぶりの上京にもそのもくろみがあった。わが嫁の実家を訪問。ご仏壇を拝し、幾ばくかのを捧げて、気休めにしようとした。しかし、合掌していると、ここは嫁のルーツ、わが家にこの嫁あり、よい孫たちが続いている、そう気がつくところ、感恩の情はわが胸にただ重りゆくのであった。

帰途、練馬・松月院の恩師下村湖人のお墓に詣でる。今回が最後、深く深く頭を下げる。「先生ノ」お呼びしたが、声にならない。わが青春は「次郎物語」に生命の道

をいい出し、壮年期は大分へ来る機縁を授けられ、わが社会教育は先生直接のご薫陶くんたう。今ある任運荘・騰々舎は先生の根本思想「任運騰々」から頂いたもの。ご生前はまだ幼児だった二男もここに額ぬかずいている。彼のこれからの人生師表が同じく先生であるよう祈る。「先生。さようなら。でも、やがてお側近く座らせて下さい」。夕闇はすでにお墓を包み始めていた。

滯京中は毎夜、兄を見舞った。倒れて意識不明のまま二カ月。手を握るとわずかに握り返す。かえってそれが心を絞る。湖人先生はこの兄を特別愛され、次郎物語の第六部のモデルに兄を決めていたが、未完のまま逝ぬかれてしまった。兄は私によく言った。「どれにしようか迷う時は、自分にとって重い方、きつい方を選べ」と。たしかに楽な方よりきつい方を選んで後悔したことは今まで一度もない。

(一九八六年四月四日)